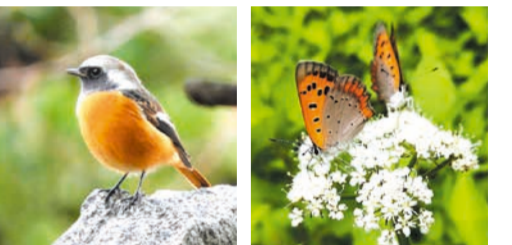


技術研究所
自然環境技術研究所 副主任 相澤 章仁氏



技術研究所
自然環境技術研究所 主任 長野 龍平氏



「自然と、つくる。」 大林組の グリーンインフラ



暮らしを守る みどりのテクノロジー

自然の恵みを暮らしや社会に意識して取り入れ、課題解決や新たな価値の創出を目指す、グリーンインフラ。大林組は様々なシーンで、長年培った技術力を生かした取り組みを推進している。技術研究所自然環境技術研究所副主任 相澤 章仁氏と、同主任の長野 龍平氏に、同社の取り組みについて聞いた。

グリーンインフラで 街を自然と共創する

「大林組が掲げる「自然と、つくる。」というコンセプトには、どのような思いが込められているのでしょうか。」

相澤 グリーンインフラは、自然環境がもつ多様な機能を社会における様々な課題解決に活用する社会資本整備の取り組みの一つです。米国をはじめ海外で取り組みが進む中、日本でも国土

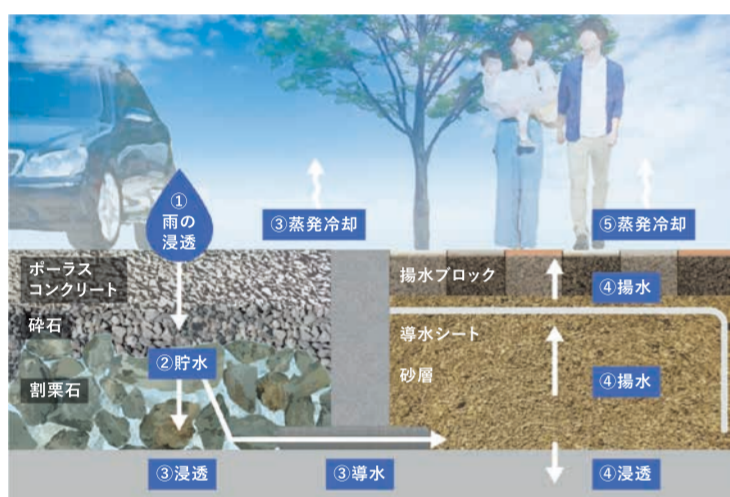
交通省が「グリーンインフラ推進戦略2023」を打ち出すなど、注目が集まっています。大林組も事業を通じて、生物多様性や自然環境の保全を行いながら、自然を活用した防災・減災や地域振興など、人びとの社会生活に有益な社会資本整備のあり方や土地利用の方法を探っています。

長野 当社流にこの概念を受け止め、コンセプト化したのが「自然と、つくる。」です。この言葉には、「自然の仕組みをしっかりと理解し、その機能を尊重した

自然の力を活用する 最新工法とその展望

「具体的な施工例や開発事例について聞かせてください。」

相澤 廃鉱山や高速道路のり面緑化で活用している技術としてチップクリート[®]緑化工法が挙げられます。通常のり面緑化工法では、強酸性の土壌やコンクリート面で種を発芽させ

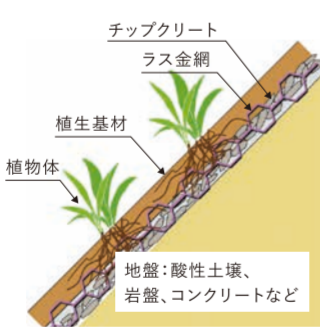


ハイドロペイブライトの仕組み

「自然をものづくりに取り入れ、人と自然が共生し、生きがいと活気あふれる社会にしたい」という強い思いを込めています。私たちは、自然科学ともつくりを融合させることでグリーンインフラは最大限の効果を発揮すると考え、日々研究開発を進めています。フロンティアゆえに試行錯誤の連続ですが、やりがい



オーク表参道での屋上緑化



チップクリート緑化工法

植生を保つことが困難でした。同工法では、伐採材チップなどをセメントミルクでコーティングして固結させ、その上に緑化を施すため、強固な根がかりが形成されます。保水力や透水性も高めることができ、植生を長く持たせることが可能です。建設時に発生する伐採材などもリサイクルして利用するため、廃棄物削減や処分費の削減も見込めます。また応用例として、チップクリートを露出した状態で使用することで緑化範囲を限定することもできます。河川敷のり面などで使用され、十分な強度を保ちながら斜面の表面侵食を防ぎ、草刈作業の軽減などに役

立っています。

を感じる仕事です。

生物多様性の保全と 評価モデルの構築

「生物多様性を守るためにどのようなことに取り組んでいますか。」

相澤 当社グループでは「生物多様性に関する方針」を策定し、生物多様性保全や生物資源の持続的活用への貢献、自社施設にて生物多様性保全に努めることなどの方針を掲げています。東京・清瀬市の技術研究所敷地内で保全している雑木林では、国や東京都で絶滅危惧種に指定されているキンランやギンランなどの希少種が生育しており、地元の自然保護団体を招いた観察会を定期的に行っています。また、雑木林では3D点群



技術研究所内の雑木林の点群データ。木々ごとにIDを振り、色分けで表現。

※公益財団法人日本生態系協会による生物多様性認証。認証期間は5年で、継続的に認証を得るためには竣工後も適切な維持管理が必要。

広告

企画・制作=日本経済新聞社Nブランドスタジオ

大林組のグリーンインフラについてはこちら

